

私は先日、仙台防災枠組についての講演会に参加した。そこで感じたのが、被災時や防災、復興においての一人ひとりの「役割」の大切さだ。講演会に参加していらっしやった方々皆さんが自分の地域のことや、これから自分たちが「あの日」と向き合って何をすべきなのかについて考え、積極的に知ろうとしていた。

現在、様々な角度から防災へのアプローチがされている。教育、言語、科学技術、建築など、そのフィールドは多様だ。講演会では学校で地震や津波について教わっていた英国の少女が、2004年のスマトラ地震・インド洋津波で、その知識を元に家族をはじめ多くの人を救ったという事例を紹介していただいた。また、地域社会の結び付きが復興に貢献した、「気仙沼の虎舞」の例も印象的だった。

これから続いていく未来のことは誰にも予測できない。しかし、未来のことについて考え、より良い方向に導こうとすることは出来る。私が思い描く「未来の防災環境都市・仙台」は、一人ひとりが自分の役割を認識し、いざという時にそれを自分や誰かの為に全う出来るような環境が整っている、というもの。

今の、そして将来の自分が果たしうる「役割」。それは「あの日」の記憶を伝え、防災のことについて学び、知る機会を大切にすること。脳内で2011年3月11日の自分にもう一度会いに行く。何も知らず、何もできなかった小学二年生の私。「マグニチュード」というどこかで聞いたことがあるようなカタカナとその横にある大きな数字が、あの帰りの会の時にやってきた大きな揺れと繋がったのは地震が起きてから数日後のことだった。また、もう一方で思い出すのが震災の時に沢山の人に会ったこと。私の周りの人はみんな、自分や他人など気にせず、相手の為に自分出来ることを進んでしていた。それがどの地域でも当たり前になることが、将来の防災に一番必要なことなのかもしれない。